



2013 年度 第 1 回 オムニバス講義（ユニット 2 担当）

- 報告題目：亡命チベット人社会における仏教と平和思想
—抗議運動への反応を手掛かりに—
- 開催日時：2013 年 6 月 14 日（金）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼 253 教室
- 報告者：日高 俊（大谷大学文学博士，2012 年度 BARC 公募研究員）
- ファシリテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- コメンテーター：能仁正顕（龍谷大学文学部教授）
- 参加者：18 人

【報告のポイント】

2009 年から断続的に報告されるようになったチベット仏教僧のいわゆる「焼身自殺」と呼ばれる中国政府への抗議運動を中心問題に据え，こうした抗議活動が亡命チベット人社会の中でどのように位置づけられ，伝達されているのか報告がなされた。また，この「焼身自殺」が仏教思想および非暴力思想とどのような影響関係にあるのかについて，検証が行われた。

【報告の概要】

日高俊氏は，「亡命チベット人社会における仏教と平和思想—抗議運動への反応を手掛かりに—」と題して，下記の通り報告を行った。

チベットが中華人民共和国領となり，1959 年にダライラマ 14 世が亡命して以降，現在までに多くのチベット人が他国へと亡命し，2007 年段階にはその総数が 145,150 人にも達した。亡命チベット人は現在も増え続けているばかりか，亡命先で第 2 世代，第 3 世代が誕生している。亡命者の半数以上は，チベット亡命政府のあるインド北西部・ヒマーチャルプラデーシュ州南西部に位置するダラムサラに居住している。ダラムサラには，チベット建築の寺院などが建てられるなど本国の雰囲気を保ちつつも，様々な国籍の人々がダライラマを慕って行き交うグローバルな都市が形成されている。ダラムサラにおいて，亡命チベット人たちは，仏教の精神に基づく平和活動を続けつつ日々を過ごしている。

こうした亡命チベット人たちを驚かせたのが，2009 年より断続的に続く，いわゆる「焼身自殺」の問題である。主に東チベット（四川省西部）を中心にチベット仏教僧によって行われており，中国政府からの弾圧に対する非暴力主義の抗議運動とされる。「焼身自殺」した僧侶たちについては，顔と名前がポスターで張り出されたり，博物館で紹介がなされたりなどしている。

ところが、こうした一連の「焼身自殺」に関して、亡命チベット人社会の中では必ずしもセンセーショナルな取り上げられ方をされてはいない。メディアも淡々とした論調で事実のみを伝える形式をとっている。ダライラマや亡命チベット政府首相も、「焼身自殺」に対して明確な否定も肯定もせず、新聞の記事も肯定と否定の両立場が併存する。こうした「焼身自殺」は、亡命チベット人たちに多くの困惑を与えている。公的見解でさえ肯定とも否定ともつかない曖昧な評価がなされている点や、否定的な意見もある一方で仏教説話等を用いた肯定的に捉える論調も確認できることから、彼らにとっても判断の難しい問題として扱われているようだ。

こうした「焼身自殺」という抗議運動の背景には、近年のグローバル化による影響が考えられる。本来、チベットに「焼身自殺」を行うという慣習はなかった。しかし、グローバル化によって、世界の仏教徒が「自殺」による抗議運動を行っているという事例を知った彼らが、「焼身自殺」という方法を自国にも取り入れたのではないか。更に、チベット本土における「焼身自殺」の発生自体が、グローバル化の影響によるものであるとも推測できる。特に、「抗議のための自殺」を行うという文化は中華文化圏からの影響であることが想定でき、その影響が及んだものともみえる。

以上のように、チベット仏教は、「焼身自殺」という、いわば極端な手法をとる方向へ向かっている印象を我々にあたえる。しかし、同時にチベット仏教が漢人にも広がっている事実も確認できる。いま、チベット仏教は伝統とグローバル化との間で揺れ動いている。しかし、チベット仏教が漢人たちの間にも広がっていくことで、仏教がチベット人と漢人との橋渡しとなり、緊迫する両国の関係を平和へと転換するひとつの足掛かりとなりはしないだろうか。

【議論の概要】

能仁氏は日高氏に対し、現在の情勢がなかなか伝達されにくいなか「焼身自殺」を中心にチベットにおける世情が確認でき、有益な報告であったと評価した。また、ジャータカなどの捨身の行為が「焼身自殺」を肯定的に解釈する際に用いられているという点に対して、『サムユッタニカーヤ』の1-8-8など、「仏陀以外の人物が自らを捨てる行為を行ってはいならない」と説く経典の存在を示し、本来的には自殺を抑止しようとする動きが仏教経典



内に見られることを指摘した。また、仏教ではあくまでも慈悲という概念のもとに自殺が語られており、抗議の意味合いを持つものではない事を強調した。

フロアからも、経済的に従属状態におかれているチベット人たちが、漢人たちとの間でどう生きようとしているのかなどの質問が出た。日高氏は、漢族からの弾圧に悩むチベッ

ト人たちが、「焼身自殺」のような極端な方法を否定しきれないでいる一方、チベット仏教を信じる漢人たちの存在もあることから、チベット人たちが現状に焦りを感じつつも希望を捨てていない、和解を待っている状態であると報告した。その他にも、僧侶たちがどういった思いで「焼身自殺」を行っているのか、など、活発な議論を提供する機会となった。



2013 年度 第 2 回 オムニバス講義（ユニット 2 担当）

- 報告題目：バクトリアの仏教遺跡
- 開催日時：2013 年 10 月 23 日（水）13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館 3 階共同研究室 1・2
- 報告者：岩井俊平（龍谷大学龍谷ミュージアム講師）
- ファシリテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- コメンテーター：宮治 昭（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー）
- 参加者：19 人

【報告のポイント】

岩井俊平氏は、文献資料に乏しいバクトリアの歴史を解明するにあたり、考古学的な方法論が問題究明の一助となる可能性を指摘したうえで、バクトリア地域の主要な仏教遺跡について紹介を行い、それらが 4 世紀後半に一度衰退する傾向にあることを明らかにした。

【報告の概要】

岩井俊平氏は「バクトリアの仏教遺跡」と題して、下記の通り報告を行った。

バクトリア（トハリスターン）は、古くアケメネス朝の碑文に認められる名称であり、漢文でも「兜呾羅」，「吐火羅」などと表記されるが、その指し示す範囲は一定していない。本報告では、アフガニスタンの北東，ウズベキスタン，トルクメニスタン，タジキスタンの一部を含む地域をバクトリアと定義し，その地域に見られる 1～4 世紀の主要な仏教遺跡について紹介する。

アム川の北岸に位置するカラ・テパは，1 世紀から機能していたとされる仏教寺院群である。この遺跡は，地上の仏教寺院と丘を掘り込んで作る石窟寺院が組み合わさった特異な寺院群で，バクトリアでは珍しいガンダーラ寺院とよく似たプランを持つ遺構も存在することから，両地域の交流の一端が垣間見える。カラ・テパは大きく南北に区域を分けることができ，そのうち南側では，寺院が一気に墓域になるという興味深い現象が見られる。その副葬品に 4 世紀後半以降のものが見られないことから，その頃にはいったん活動を停止したと考えられるが，近年発掘の進む北側の丘からは，南側の丘の副葬品よりも新しいタイプの土器が出土している。したがって，北側では断続的な活動が行われていた可能性も

あるが、基本的な機能は4世紀頃に一旦衰退したものと考えられる。

カラ・テパから1キロ程度離れたファヤズ・テパは、ガンダーラ式の平面プランが採用されるバクトリア寺院として知られる。特に、ファヤズ・テパ出土の仏坐像は、古くからバクトリア仏教美術の最高傑作と名高い。同遺跡から発掘される墨書土器に5世紀以降の書体が見当たらないことなどから、5世紀以前に活動を終えていたものと考えられる。

廃絶したことが確実な仏教遺跡としては、ダルヴェルジン・テパの仏教寺院址が挙げられる。ダルヴェルジン・テパ都城址の内外にひとつずつ仏教寺院が存在しており、外側の第一仏教寺院址が先に廃絶したとされている。多くの塑像が出土したことで知られる第二仏教寺院址は、その床面の土層に5世紀以降の土器が出土する新しい床面が確認できることから、4世紀後半には確実に廃絶していたことがわかる。さらに近年、創価大学によって塑像が出た床面の炭化物の放射性炭素分析が行われ、同様の可能性が示された。

これらのほか、アム川北側ではイルタムをはじめいくつかの寺院遺構が知られているが、廃絶年代などを決定付ける証拠は発見されない。一方、アム川南側では、確実にクシャーーン朝時代にまで遡る遺構は発見されていない。ガンダーラの影響を受けた石灰岩製の彫刻は一定数確認されており、美術史側の編年では4世紀前半頃までの年代が与えられているものの、確たる証拠はない。

以上、考古学的に集められるデータをまとめると、バクトリアの仏教寺院に関してのみ言えばクシャーーン朝期にまで遡るものが複数あるが、その多くが4世紀後半に廃絶していたといえる。旧ソ連圏の研究者たちはバクトリア全体が4世紀後半に衰退したという前提から解釈をスタートし、遺跡の衰退を古代（奴隸制）から中世（封建制）への過渡期に必然的に伴う社会的混乱によるものとしてきた。しかし、その時期に仏教寺院だけではなく、バクトリア全体が衰退したという考古学的証拠は見出せず、今後、文献研究や貨幣学といった、近年発達してきた知見の援用によって改めて解釈されていく必要がある。特に、シャープール二世の東征によってササン朝の政治的支配がバクトリアに強く及んでいたであろうことがほぼ確実に視されるようになってきた近年の研究動向、また、寺院の衰退に関するモデルケースとして、支配者の変遷やパトロンの減少に伴う衰退を経験したと考えられるガンダーラの仏教寺院の例が援用できるかもしれない。

【議論の概要】

宮治昭氏は、バクトリア地方の遺跡全体の編年状態について、最新の研究成果を交えた有益な報告であると評価したうえで、遺跡の絶対年代を何によって決定するか、クシャーーン朝がどの年代までさかのぼれるかについて質問した。岩井氏は、ひとつめの質問に対し、床面の遺構に伴う形で炭化物や木製品が出土した場合には放射線炭素年代測定法などを用いることが可能だが、この方法では非常に広い幅で年代が測定されてしまうため、基本的には絶対年代を決定することは不可能であるとした。次にふたつめの質問については、イルタム出土碑文を信じるのならば2世紀まで遡ることができるが、現状で確実な証拠は

存在しないと述べた。

吉田豊氏からも、出土した銀器と土器の関係について、また、4世紀後半に仏教遺跡が廃絶するのに対し、住居遺跡はどうであったのかについて質問がなされた。最初の質問に対し、土器の研究者の多くが、基本的には銀器の登場が土器の登場に先行することを前提とし、銀器の器形を土器が模倣したと考えていると答えた。またふたつめの質問には、4世紀後半に町全体が一度に廃絶するというわけではないと述べ、ソグド地域において遺跡が一度廃絶するが、それは短いスパンであってすぐに復興へ向かうという説を紹介し、バクトリアも同様の状況であったのではないかと回答した。



2013年度 第3回 オムニバス講義（ユニット2担当）

- 報告題目：中央アジア出土の律文献—出口コレクションを中心に—
- 開催日時：2013年11月20日(水)13:15～14:45
- 場所：龍谷大学大宮学舎清風館3階共同研究室1・2
- 報告者：岩田朋子(龍谷大学龍谷ミュージアム講師)
- ファシリテーター：入澤 崇(龍谷大学文学部教授, 龍谷ミュージアム館長)
- コメンテーター：宮治 昭(龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー)
- 参加者：17人

【報告のポイント】

出口コレクションは、出口常順氏が引き取ったドイツ探検隊将来のトルファン出土写本の一部であり、その写本のほとんどがかつての高昌国の仏教寺院址から発見されたものである。このコレクションには5世紀頃の漢文古写本がいくつか確認でき、鳩摩羅什をはじめとした翻訳僧の活動と時期を同じくする点から、仏教經典の伝播の歴史や隋唐代における西域諸国の文化事情を知る手がかりとして重要である。岩田朋子氏は、この出口コレクションの紹介とともに、漢訳律文献の概要について報告を行った。氏は出口コレクションの中でもとくに『十誦律』の「受具足戒法」および「十誦尼律」の写本について解説を行い、写本の内容を把握すると同時に、その用途も考慮することが重要であると指摘した。

【報告の概要】

岩田朋子氏は、「中央アジア出土の律文献—出口コレクションを中心に—」と題して、以下の通り講義を行った。

出口コレクションは、出口常順師（大阪・四天王寺 101 代目管長）が引き取った、ドイツ探検隊将来のトルファン出土写本と呼ばれる資料群の一部であり、その総数は断片も含めて約 130 件にのぼる。出口コレクションの特色としては、かつての高昌国の仏教寺院址から発見されたものがほとんどであるという点が挙げられよう。高昌国とは、現在の中国新疆ウイグル自治区のトルファン市郊外に位置したとされるオアシス国家を指す。本コレクションには、鳩摩羅什ら翻訳僧が活発に活動した 5 世紀頃の漢文古写本が数例確認でき、藤枝晃が指摘するように、仏教經典の伝播の歴史、隋唐時代における西域諸国の文化事情を知る手がかりとして重要である。

ところで、出口コレクションの中には『十誦律』『受具足戒法』と『十誦尼律』が存在する。律文献の種類としては、主に「六広律」と呼ばれる『パーリ律』・『十誦律』・『四分律』・『摩訶僧祇律』・『五分律』・『根本説一切有部律』（以下、『根本有部律』）があり、漢訳律文献の訳出年代は、『十誦律』が最も古いとされる。出口コレクションに含まれる『十誦律』『受具足戒法』の写本は 5～6 世紀頃の書写であるといわれており、最も古層に位置付けられる。したがって、この写本の書写が『十誦律』訳出からほどなくして行われた可能性も指摘されている。

また、律文献は主に、①「波羅提木叉（戒本）」（個人の生活規則）、②「経分別」（「戒本」における条文制定の由来の集成）、③「犍度部」（集団全体が守る規則および規制制定の由来の集成）、④「附随」（上記②③に対する補足説明）という 4 つの要素から構成される。このうち、「受具足戒法」と『十誦尼律』は②「経分別」に該当する部分である。

ところで、出口コレクション中の「受具足戒法」写本（D501）をみると、興味深いことに縦幅が 14 センチメートルほどしかない。同時期の写本が 29 センチメートルほどあるのに比べると、半分ほどの大きさであることがわかる。なぜこのような小型の形態をとったのかという問題について、藤枝は、この写本が出家受戒式の式次第を書写したものであるという点に着目し、戒師（出家受戒式を取り仕切る長老比丘）が携帯するという用途をもっていたのではないかと指摘した。報告者の調査によるかぎり類例は見つかっていないことから、今後の発見を待つて慎重に判断したい。

以上のように、律文献の写本については内容を把握すると同時にその用途についても考えていく必要がある。また、律文献と実際の僧団運営についても今後検討していくべき課題である。

【議論の概要】

宮治昭氏は、出口コレクションについての概要を端的に解説した岩田氏の報告を評価したうえで、出口氏に資料を譲渡したとされるラフマティ氏の人物像について、また、律は当初から現在我々が知るような形であったのか、それとも時代や地域ごとに増広されたの

かについて質問した。岩田氏は、まず、ラフマティ氏が学者としてドイツ隊がもたらした資料整理に従事していたことまではわかっているがトルコ帰国後の詳細は不明であると回答し、ふたつめの質問に対しては、例えばその原典がセイロンからもたらされたとされる『五分律』は他の律に比べて水害に関係するものが多く、有部系の律文献とくに『根本有部律』では寒さ対策についてのものが多いなど、地域性が認められるという事例を紹介した。

吉田豊氏は、中央アジアにおいて律文献のトカラ語訳やソグド語訳が発見されるとの情報提供を行うとともに、イラン系言語の写本やマニ教関連の写本にしばしばみられる小型の形態をとる写本の特徴として文字が大きいことを指摘し、手に持って読む為に作られたことが明らかである例として紹介した。そのうえで、「受具足戒法」写本（D501）は文字が小さいが、同様の用途をもって作られたかについて質問した。岩田氏は、D501は手に持たないと見えにくい程度の文字の大きさであること、内容が出家受戒式を成立させるために必要な場面が含まれることから、重要な部分を手に持って使うために作られた可能性を藤枝によっても指摘されていると紹介した。また多くの律文献の写本の中には戒本を書写したものが多く、生活規則のなかで重要なものをとどめ携帯するために使われた可能性も考えられるとした。

入澤崇氏は、ある場所から律文献が発見されると、その場所はその律文献を伝持していた部派の活動領域であったと見なされがちであるが、四方僧伽（仏教僧団全体のこと）つまり、東西南北の四方で自由に修行する僧という理念からすると異なる部派が交流することはあり得ることであって、各教団を包括するような精神を律の方面から発信していたのではないかとコメントした。



2013年度 第4回 オムニバス講義（ユニット2担当）

- 報告題目：敦煌石窟の毘沙門天像
- 開催日時：2013年12月9日（月）15:00～16:30
- 場所：龍谷大学大宮学舎西翼2階大会議室
- 報告者：大島幸代（龍谷大学龍谷ミュージアム助教（学芸員））
- ファシリテーター：入澤 崇（龍谷大学文学部教授，龍谷ミュージアム館長）
- コメンテーター：宮治 昭（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー）
- 参加者：22人

【報告のポイント】

敦煌の毘沙門天図像は画題が豊富であり、唐内地の毘沙門天図像がほとんど単独の立像として作られるのとは異なる様相を持つ。こうした敦煌の毘沙門天図像のパラエティの豊かさは、于闐にかかわるさまざまな画題の中に登場することが多いという点と関係する。大島幸代氏は、敦煌の毘沙門天図像について東西の文化交流に注目しながら考察を行った。

【報告の概要】

大島幸代氏は、「敦煌石窟の毘沙門天像」と題して下記のように報告を行った。

唐時代、毘沙門天は、敵を退け国を守る退敵の神（戦神）あるいは護国神として、四天王から独立し、単独で信仰された。このような信仰の核となったのが、安西（現在の新疆ウイグル自治区キジル周辺）を舞台にして毘沙門天の靈驗が説かれる「安西城靈驗説話」であり、仏教施設のみならず、政庁・軍営等にも毘沙門天像が祀られたとされる。この毘沙門天信仰は、平安初期に日本にも伝入し、京都・東寺の毘沙門天像やその模刻像でも知られるように、日本においても流行した。

ところで、唐にはもともと「安西城靈驗説話」とは別系統の于闐を舞台にした毘沙門天の靈驗説話（「于闐城靈驗説話」）も伝わっていた。李筌撰『太白陰経』（759 年上表）などから説話の整理を行った結果、毘沙門天信仰の根拠として、唐代後半以降の文献に繰り返し引用されたのは「安西城靈驗説話」の方であり、「于闐城靈驗説話」の方はあまり定着しなかったことが明らかとなった。ただし注目すべきは、引用される文献に明らかな偏りが見られることである。「安西城靈驗説話」の方は仏教書、「于闐城靈驗説話」は仏教書以外のものに引用されていく傾向がみられるのである。

一方、敦煌では唐の内地の毘沙門天信仰とはいささか異なる様相が見られる。石窟美術等を見る限り、唐内地で流行した戦神としての毘沙門天信仰は下火であり、むしろ于闐と関わる画題の中に様々な位置づけで登場しており、于闐を発信源とする新たな情報や刺激を敦煌の人々が受け入れて制作に繋げた可能性がある。荣新江氏によれば、曹氏帰義軍時代に一度は断絶していた中原や西方との交流が回復し、盛んな往来が行われたという。敦煌は東西の結節点として各地の仏教文化が集積し、美術についても新たな表現が生まれたのであろう。

なかでも、騎獅文殊像の中に現れる着甲の馭者像と毘沙門天像との関わりは、敦煌における特異な毘沙門天像のひとつに挙げられよう。これを仮に「毘沙門天型于闐王像」と称しておくが、この形の像は榆林窟第 19 窟、同第 32 窟の騎獅文殊像の中に確認される。こうした馭者の姿の基になったのは、莫高窟第 220 窟に描かれた新様文殊像であり、傍題から本作例の馭者像は于闐国王と関係するものであることがわかる。その姿形は三角の胡帽、赤い円袍、長靴、長い顎鬚という特徴をもち、この後、騎獅文殊像の馭者の定型となるいわゆる「于闐王像」と称される胡人形馭者像の表現をとる。榆林窟第 19 窟、第 32 窟の馭

者像は、この新様文殊像の胡人形馭者像と赤い円袍をまとう点等で部分的な共通点がみられ、これを念頭に置きつつ改変を加えて描かれた可能性が高い。その改変の図像要素を挙げると、天部形に特徴的な三面頭飾をつけた宝冠や足甲、毘沙門天のアイデンティティである鬼面装飾がある。その改変には、天王像の服制や甲制が強く意識されていることが注目され、新様文殊像の写し崩れとは考えがたく、意図的に選ばれたモチーフであることを予想させる。

東西交通の要衝である敦煌において、中国内地で特別な扱いを受ける東方の五台山文殊信仰と、西方の于闐で神聖視される毘沙門天への信仰が、五台山を背景にした騎獅文殊の化現という画題の中で融合をみせていると考えられるのである。こうした作例は、10世紀の敦煌であってこそ誕生しえた東西文化交流の結晶とみてもよいのではなかろうか。

【議論の概要】

宮治昭氏は、毘沙門天の靈驗説話がわかりやすく整理されたことを評価したうえで、説話の舞台となった安西周辺で実際に毘沙門天信仰はあったのか質問した。これに対し、大島氏は、現時点では文献資料や美術作例から安西における毘沙門天信仰の実態がつかめておらず、当該地域で実際に行われていたかは不明であるとした。

また、宮治氏による、于闐・敦煌・四川の毘沙門天信仰がそれぞれの政治状況と関わりがあるのかという質問に、大島氏は、四川については9世紀頃に数度にわたって南詔が攻め込んだという史実があり、それにあわせて毘沙門天の靈驗説話を作り出したり、南詔の侵攻ルート上の摩崖石窟に毘沙門天像を造るなどの対処を行うなど、南詔との敵対関係のなかで毘沙門天信仰が大きく定着・流布したことが考えられるとした。敦煌においては、画題が多岐にわたっており包括するのは難しいが、戦神信仰に関していえば、吐蕃から独立するという時にあたって張議潮の周辺で戦神としての毘沙門天信仰が行われた形跡がいくつか確認出来るが、それ以降の9世紀末～10世紀に入ると、于闐の図像の中で現れてくるという形になり、少々変質しているのは確かであると回答した。

